

むすんで
拓け!

- 7 -

昨年10月に復元された東京駅丸の内駅舎。北口、南口それぞれに再建されたドーム内壁には、99年前の創建時のままに、石膏の装飾が白く輝いている。

創建時の内装は戦争で焼失していた。それを5年がかりで再現したのが、戸田市新曽南にアトリエを持つ「植野石膏模型製作所」のスタッフ約15人だ。

「創建時の白黒写真を頼りに、装飾を細部までよみがえらせる」という依頼内容。同社は、迎賓館などの装飾を手がけた実績があるが、東京駅については資料が乏しく、植野守人専務(50)は「どのくらいの手間がかかるか見当がつかない」と思案こねた。

伊勢神宮に奉納されている玉纏太刀。豊臣秀吉が身に着けていたかぶと。鉄道の動輪を中心に、上には鳳凰、両脇には矢の束が配置されたオブジェ。

東京駅復元 職人の粘り

「西洋風だが、装飾を一つ一つ見ると日本のものがたくさんあって、年代もジャンルもバラバラ。突き止写真を拡大・縮小しながら

東京駅丸の内駅舎 1914年に創建された東京駅丸の内北口から南口にかけてのレンガ造りの駅舎。45年に戦災で一部が焼失。昨年10月、北口、南口にそれぞれドーム屋根などが復元された。JRは「原形に戻す」の意味で「復元」と呼んでいる。



東京駅丸の内駅舎の石膏装飾を再現した原田さん(前列右)、佐々木さん(後列右)、池山さん(同中央)ら。手前はレリーフの原型で、中央奥の壁にあるのは鳳凰などのオブジェ(戸田市の植野石膏模型製作所)。

「西洋風だが、装飾を一つ一つ見ると日本のものがたくさんあって、年代もジャンルもバラバラ。突き止写真を拡大・縮小しながら

例えば玉纏太刀。写真では棒状のオブジェとしか見えない。だが、設計をした建築家の辰野金吾の趣味は刀剣収集。「刀の類いなのでは」と思い至った装飾部長の原田雅史さん(49)らは

2009年5月、東京・上野の東京国立博物館を訪れ、研究員に写真を見せながら相談した。「ピンぼけだが、刀のように見える」

研究員は写真を見つめると、「例としてはこういうものがある」と図録を取り出した。たまたま開催を控えていた伊勢神宮の特別展の図録に、何振りかの玉纏太刀が掲載されていた。玉

をちりばめた糸が柄に絡まっている様などが似ている。「これだ」

さらに、原田さん(44)が、博物館の常設展示を見て「ビビッときた」。平安後期の太刀。右胸を守る長方形の「梅檀の板」の特徵が、白黒写真中のまた別のオブジェと一致していた。

粘土造形の池山栄一さん(62)が「皆の意見を集約した」と語るのは、ドーム内部の八つの隅に飾られていた、千支のレリーフ(浮き彫り)の再現。十二支のうち八支とわかっていながら、写真をいくら拡大しても「竜なのに竜に見えない」「猿が何かを背負っている」など、一筋縄ではいかない



復元の資料となった、1914年の創建当時の丸の内駅舎写真(JR東日本提供)

ものばかり。

羊は写真をよく見るとアゴがとがっていて、ヒゲにも見えた。調べると、当時の日本では羊の飼育がまだ本格的でなく、羊の代わりにヤギが描かれている可能性が高いことがわかった。装飾の監修をした東京芸術大の深井隆教授(61)は「写真を頼りに解明した。私は何度もダメ出ししたが、職人さんたちは粘り強く、いいものを作ってくれた」と絶賛する。

11年11月、南北合わせて61種類、計約7000ピースからなる壁面装飾が完成した。レリーフの台座部分などを担当した石橋朋英さん(32)は、「普段の仕事は一般の人は見られないが、東京駅は誰でも見られる。自分たちの仕事をみんなに知ってもらえるいい機会になった」と話す。

職人たちのプライドをかけた粘りと技術が、首都の玄関口に凝縮された。

(おわり)

(木口順晶、矢野由希子、木村優里、田村美穂、堀合英峰が担当しました)